

平成27年4月21日

平成27年度病害虫防除技術情報（第1号）

和歌山県農作物病害虫防除所

ヒメトビウンカ（越冬世代）の生息量
およびイネ縞葉枯ウイルスの保毒状況について

1. 調査地域：県北部（和歌山市、かつらぎ町）
2. 調査時期：4月上旬
3. 調査結果
 - 1) 和歌山市3地点およびかつらぎ町1地点におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、12.5～18.8%といずれの地点においても前年（9.1～16.0%）と比べてやや高い（表1）。
 - 2) 和歌山市およびかつらぎ町における保毒虫率は平成19～26年の平均と比較すると、和歌山市ではほぼ同等であり、かつらぎ町ではやや高い（表2）。
 - 3) 休閑田におけるヒメトビウンカの生息数は、4月上旬の和歌山市で11.7頭（平成6.8頭）、紀の川市で10.0頭（平成7.0頭）、かつらぎ町で9.0頭（平成4.4頭）と、平年に比べてやや多い（表3）。
 - 4) 平成26年の県北部普通期本田（有田地域以北）におけるイネ縞葉枯病発生面積率は17.7%であり、平成25年の発生面積率の11.8%より高い（図1）。また、この値は平成（14.9%）よりやや高い。

表1. ヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率^{a)}

調査地点	平成27年 ^{b)}		平成26年 ^{c)}	
	検定虫数 (頭)	保毒虫率 (%)	検定虫数 (頭)	保毒虫率 (%)
和歌山市小倉	128	12.5	77	9.1
和歌山市直川・紀伊・川永	122	15.6	51	11.8
和歌山市平尾・明王寺	101	18.8	69	16.0
かつらぎ町窪	115	17.4	50	12.0

a) 検定方法：高比重ラテックス凝集反応法

b) 調査日：平成27年4月2～9日

c) 調査日：平成26年4月4～15日

表2 和歌山市およびかつらぎ町におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移（単位：%）

調査地点	平成 19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	平成19～26年 の平均
和歌山市平均	18.1	16.4	17.7	15.3	14.7	16.1	13.2	12.3	15.6	15.5
かつらぎ町窪	-	16.0	11.3	19.1	12.7	15.9	16.9	12.0	17.4	14.8

※ヒメトビウンカ採集及び検定は4月上旬～中旬。なお、検定虫数50未満の調査結果は除く。
検定は高比重ラテックス凝集反応法にて実施。

表3. 休閑田におけるヒメトビウンカの生息数（単位：頭）

調査時期	調査地点	平成27年	平年
4月上旬	和歌山市	11.7	6.8
	紀の川市	10.0	7.0
	かつらぎ町	9.0	4.4

注) すくい取り調査（捕虫網20回振り）

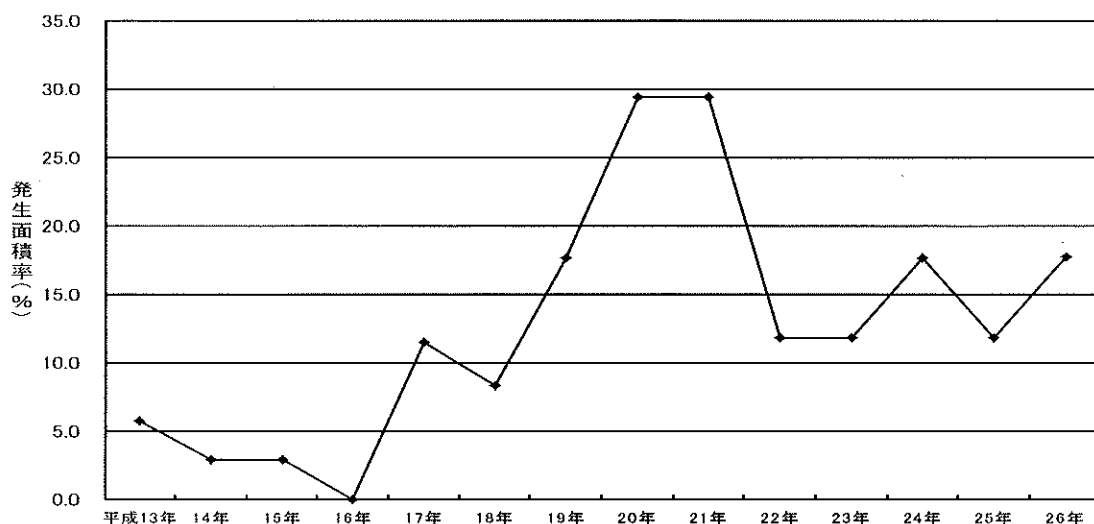


図1 県北部普通期本田におけるイネ縞葉枯病の発生面積率の推移

※平成26年の県北部普通期水田面積は4,636ha（有田地域以北）

※平年（平成16年から平成25年の過去10年の平均）は14.9%

4. 防除上の注意事項

- 1) イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。
- 2) 窒素過多はイネ縞葉枯病の発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- 3) 田植え時はヒメトビウンカに効果がある育苗箱施薬剤を処理する。
- 4) 第1世代成虫は6月下旬頃に水田へ飛来し、第2世代幼虫の発生最盛期は7月上旬と考えられることから、前年にイネ縞葉枯病の発生が認められた地域では、この時期の幼虫を対象に追加防除を行う。
- 5) 本県の水稲奨励品種のうち、ハナエチゼン、イクヒカリ、キヌヒカリ、きぬむすめはイネ縞葉枯病に罹病しやすいので、上記について特に注意する。
- 6) 農薬については、最新の登録情報（http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm 農林水産消費安全技術センターHP農薬登録情報提供システム）を参照し、適正に使用する。
- 7) イネ縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカは、休閑田やほ場周辺のイネ科雑草で越冬するので、冬期水田の耕起を励行する。

担当：農作物病虫害防除所
岡本晃久、岡本崇
電話：0736-64-2300